

どうしても書いてしまう大相撲観戦雑記  
～平成 24 年名古屋場所を終えて～

千秋楽・結びの一番・全勝同士の決戦 大相撲史上稀に見る出来事となった。結果的に大関日馬富士の優勝で幕が下りはしたが、いくつか気になったことがある。先場所は終了直後に旅に出ってしまったため書くことができなかったので、そろそろ書きたくなってきた。

### <1> またまた綱取り騒ぎか

白鵬は全勝で千秋楽を迎える所まで行きはしたが、相撲に安定性が欠けていた。腰の構えや膝の曲げ具合はいつものように完璧であったが、相手のいなしに即座に対応できずに泳ぐ場面が目立った。おまけに肌の張りが無いようにも感じられたので、どこかにトラブルを抱えているようで、万全の体調ではないと見た。それでも千秋楽まで無傷で進んで来られたのはさすがと言える。

H21-1 月	8 勝 7 敗	新大関
H21-3 月	10 勝 5 敗	
H21-5 月	14 勝 1 敗	優勝
H21-7 月	9 勝 6 敗	
H21-9 月	9 勝 6 敗	
H21-11 月	9 勝 6 敗	
H22-1 月	10 勝 5 敗	
H22-3 月	10 勝 5 敗	
H22-5 月	9 勝 6 敗	
H22-7 月	10 勝 5 敗	
H22-9 月	8 勝 7 敗	
H22-11 月	0 勝 4 敗 11 休	
H23-1 月	8 勝 7 敗	
H23-5 月	10 勝 5 敗	
H23-7 月	14 勝 1 敗	優勝
H23-9 月	8 勝 7 敗	
H23-11 月	8 勝 7 敗	
H24-1 月	11 勝 4 敗	
H24-3 月	11 勝 4 敗	
H24-5 月	8 勝 7 敗	
H24-7 月	15 勝	優勝

千秋楽の全勝同士の決戦を制したのは大関日馬富士となった。鋭い突っ込みと素早い動きは絶好調を感じたが、まさか優勝できるとは思ってもいなかった。白鵬が不調だったことも手伝って決戦を制することができたと読むこともできるだろう。

大関が優勝するとすぐに恒例の「綱取り」騒ぎが起きることになる。マスコミが騒ぐこともさることながら、理事長・審判部など相撲協会の中にも騒ぎに火を付ける奴がいる。一人横綱が不自然だということから、もう一人の横綱を作ることを焦る気持ちはわかるが、事を運び間違えと思わぬ結果を招くかもしれない。

日馬富士の成績を斜めから読んでみる(左表:大関 21 場所の成績) 今場所を含む直前 6 場所の成績は 61 勝 29 敗(勝率 0.677)。しかし先場所は 8 勝 7 敗であり、しかも直前 6 場所の内 3 場所は 8 勝 7 敗である。さらにその前 6 場所を見ると 50 勝 29 敗 11 休(勝率 0.555)であり、さらにさらに遡っても優勝した場所以外は 9 勝 6 敗や 8 勝 7 敗が並んでいる。優勝三回という美しい部分だけを取り出すと好成績に見えるが、実のところは「不安定」な大関で、「品格力量ともに抜群」とは言い難い。私見としては、二場所だけの瞬間風速のような成績で判断しようとする「綱取り」騒ぎには否定的にならざるを得ない。

### <2> 大関の評価はいかに

鳴り物入りで誕生した新大関達も少々期待外れの感が否めない。鶴竜は 9 勝 6 敗、自分の持つ力も技も全く発揮できずに終わった。

速さ・粘っこさなど鶴竜ならではの持ち味が見られなかったのは意外だった。

稀勢ノ里・琴奨菊は辛うじて 10 勝を上げることができたものの、内容は期待外れどころではないひどさだった。稀勢ノ里は腰が下りて、強いおっつけと前進で相手に圧力をかけて寄る力強い相撲でスタートしたが、安美錦に敗れた相撲からリズムが狂い始め前半戦から取りこぼしを重ねた。自信を持って自分の強みにこだわった取り口を続ければ何のこともないはずなのに、それが出来ていない。また、立ち合いの迷いが原因と思われる「つかかけ」や「手つき不十分」も露呈した。自分の「立ち合いの心構え」が立ち合いの瞬間まで定まっていなかったのではないかと。心技体の中で「心」を鍛える必要もある。

琴奨菊は碧山に敗れるという不始末をやらしたが、前半は 1 敗で切り抜けて期待を持たせた。しかし上位戦になってからの星が上がらず、日を追ってずるずると後退してしまった。出稽古等で自分の苦手とする力士をなくして行く努力をしていかないと、この地位での星は上がらない。

把瑠都も 9 勝 6 敗、前半戦は彼独特の腰高で強引な力相撲で走りまくったが、相撲巧者との対戦が続く後半戦で失速した。相撲の基本が身に付いていないため、弱点を攻められると簡単に敗れてしまう。四股を踏ん

で下半身を鍛えること、低い腰の位置で相撲を取ること、脇を固めて下からまわしを取ることなどを身に付けて行かないと怪我の可能性もあるし、やがて大関の地位も危なくなるかもしれない。

琴欧洲も同じく 9 勝 6 敗、先場所の怪我の後を引きずっての出場とのことだったが、やっぱり・・・と言われる結果に終わった。豊ノ島・隠岐の海などの今場所勝ち越しができなかった力士にまで負けているようでは寂しい限りである。投げの打ち合いになると自分から先に手を付いてしまい負けとなるケースもいくつも見られた。また、両肩に力を入れて上から覆いかぶさるようにまわしを取る癖が依然として直らず、このために下半身に重心がなくなり安定性を欠く結果となっている。足腰に故障がある時にこそ基本どおりの腰の構えが求められる。

### <3> 新しい力の台頭

次の時代を感じさせる新しい力として、妙義龍が飛び出してきた。新小結の場所、千秋楽に辛うじて勝ち越して技能賞を受賞した。関脇・小結での勝ち越しが他にいないので、来場所は関脇に昇進すると考えられる。低い腰の構え、前傾姿勢ながら前に落ちないバランスの良い足の配置、稽古で鍛え抜かれた足腰、基本に忠実な相撲のスタイル、どれをとっても関脇として活躍できる可能性を示している。

(右写真：妙義龍 鶴竜を破る)

高安は前半戦 8 連敗と振るわず、どうなってしまったのかと心配したが、後半持ち直してなんとか 6 勝 9 敗に留めた。9 日目以降を 6 勝 1 敗で切り抜けたところを見ると、追い込まれても精神的には強い力士のような気がする。腰痛を抱えて、その対策として前進相撲にこだわった魁聖は 11 勝を上げて敢闘賞に輝いた。外国人力士としては珍しく太ももが太く立派な下半身をしているが、腰が割れないという外国人特有の癖があり、これが腰痛の原因となっているようにみられる。



魁聖とともに敢闘賞を得た升ノ山の相撲は気持ちが良い。新入幕直後の怪我で十両に陥落してしまったため二度目の入幕となった今場所、怪我の回復を機に前進相撲にこだわった。立ち合いの突進と回転の速い突っ張り、さらに体ごと前進する圧力、きびきびとした気持ちのよい動き、13 枚目での 11 勝 4 敗は素晴らしかった。来場所の上位陣への挑戦が楽しみな若手である。

松鳳山は前頭 3 枚目まで躍進し、多くの人が壁をぶち破れるかどうか心配した。前半戦は大関戦などもあり 2 勝 6 敗に終わり、初の上位挑戦の場所はこんなものかなと思ったが、何と中日以降を 7 勝 1 敗で切り抜けて見事に勝ち越した。立ち合いの鋭い突きと前進、まわしを取っても凌げる力も付いてきた。前に落ちることが少なく、稽古量の多さを感じさせる。上背の高い相手に対しても上突っ張りで行くために懐に入られやすいが、それでも突っ張りで突き進む。もう少し下の方を突くようにすればと思うのだが、喉元を突きたいらしい。毎場所少しずつ強くなっているように見えるが、この点を改善すればさらに星が上がるようになると思う。何よりも土俵上での毅然とした表情がいい。(上の写真)



大道は右四つの型を持っている力士だが、これまであまり目立った活躍をしたことはなかった。今場所は立ち合いの踏み込みが良いのと、右四つの型に持ち込むと素早く寄り立てる相撲が光っていた。この場所がブロックではなく、来場所以降にも持続してくれることを期待したい。

### <4> 伸びない力士の なぜ？

栃煌山ほど好不調の波の激しい力士はいないかもしれない。大混乱の先場所は旭天鵬と優勝決定戦をしたかと思えば、今場所は 4 勝 11 敗というお粗末な結末。前さばきよく両差しになった時には強いが、その形に持ち込めなかった時にはみつももない負け方をする。しかも叩かれると簡単に土俵に這いつくばってしまう所を見ると基本的な稽古がきちんとできていないと思われる。次の大関は・・・という問いに多くの相撲解説者が名を揚げるが、全く問題外の存在だと思う。

豪栄道は場所中にろっ骨骨折とのことで千秋楽に休場し、7 勝 7 敗 1 休となった。受け身になっても器用にこなして何とか勝ちに持ち込む力を持っているが、「豪栄道はこれ！」という太い柱が見当たらない。もたもたしていると同じ部屋の妙義龍に先を越されてしまうかもしれない。

豊ノ島の相撲は土俵際までわからないという面白さがあるが、これだけで終わってはつまらない。軟らかな足腰で、反り身になっても技を繰り出せるのが特徴だが、受け身の相撲だけでは限界がある。今場所の 5 勝

10敗が証明している。短軀とあんこと前さばきの上手さを活かして、前みつを取って突っ走る相撲に徹した方が怪我の心配もないし将来性もあると思うが。

隠岐の海は大きな体と柔らかな足腰で、大鵬の再来かと騒がれた時期もあったが、このところ停滞気味である。がっぷり四つになった時に顎を出して空を見るような型になることが多いし、また上手も下手も深く取り過ぎているので相手にも攻められやすい。浅くまわしを取り、じわじわと腰を落としていくと相手が脅威を感じる筈だ。もう大器と騒ぐ人はいなくなってしまった。

阿覧・栃の心はレスリング出身と思われる上半身の力で相撲を取るタイプ。しかも上手を外から掴む取り方をするため、脇が空いて力に無駄が出ている。脇を締めてまわしを取る取り方を覚えないと、いつまでも怪力相撲だけで進歩しない。

## <5> 味があるベテラン力士

先場所平幕優勝を果たした旭天鵬は、天国から地獄へ落ちたような2勝13敗。辛うじて全敗を免れたが、彼本来の相撲が出来ていたのは千秋楽の一番だけだった。稽古で磨き上げられた艶と張りのある肌、イベント続きで稽古ができていなかったのではないだろうか。まだ続けて欲しい力士の一人である。

安美錦は残念ながら負け越してしまっただが、毎場所優勝戦線を左右する力士としてなくてはならない存在である。前傾姿勢での鋭い突進あり、左右の動きあり、頭を付けての粘りもあり、タイミングを合わせた美しい投げもある。横綱・大関との対戦に「もしや？」を感じさせる楽しさがある。勝負に入る前にその日の自分の相撲の筋書きをきちんと考えているようなので、勝ち名乗りを受けた後でのインタビューの会話が相撲解説者のようで面白い。

若の里・雅山ともに8勝7敗に留まりはしたものの存在感を感じさせる土俵が多く見られた。若の里の前さばきと太い腕から繰り出すすくい投げが三番も見られた。盛り上がった筋肉は、年齢を積み重ねても稽古に怠りがないことを示している。一方の雅山は体重が乗った思い突きと、ここぞと思う時のいなしが武器で、勝った相撲8番はすべて突き・押し・いなし・叩き。体の張りがなく肉がたるんできたが、まだもう少し続けられそう。30代半ばになっても現役を続け、しかも若々しい土俵を見せてくれるベテラン力士には、それなりの基盤整備と努力が重なってのことに違いない。

## <6> 相変わらず改善されない立ち合い

立ち合いが合わず後味が悪い勝負になったケースが数多く見られた。毎場所のことではあるが、この場所は特にそれが目立った。

大きな原因のひとつは、「手を下して」の動作がルール化されてはいるが標準化されていないことにある。白鵬・豊真将・妙義龍のように両手を土俵に下してから立ち上がるケースと、琴奨菊・稀勢の里等のように立ち合いの瞬間に手の一部が土俵を撫でれば良いとする立ち合いと大きく二つの大別されるのが実態。殆ど場合は、後者の力士が立ち合いの乱れのきっかけを作っていることが多い。

ふたつ目の原因は、呼び出しに呼ばれて土俵に上がった時から始まっている立ち合いまでの時間の過ごし方にある。土俵に上がった時から立ち合いの一瞬まで、相手の動きから一時も目を離さない白鵬の仕切りは素晴らしい。どこを見ているのかわからないし視線が安定しない力士が数多く存在するが、これらの力士達は立ち合いの乱れを呼ぶ「自分勝手な仕切りと立ち合い」をしている。

三つ目の原因は、「手を下して!」「のこった!」と仕切りを司る行事の仕事ぶりにある。手つき不充分的力士に待ったをかける行事が限られているように見える。つまり、行事の仕事にばらつきがあることである。

「手を下して!」の声に反応しない力士にはその場で制裁(負けまたは罰金)を課すような毅然としたルールと、行事に強い権限と責任を与える運用が必要と考える。

そのためには、「手を下して」の動作の標準化が先決課題であると考え。大関以上の地位にある力士が立ち合いの不十分さを指摘されるようでは、相撲全体のレベルが上がって行かない。即刻対処すべき重要課題である。

以上

<おことわり>

文章の中に使われている写真は、Yahooの画像 search から借用しました。